

香川大学教育学部 附属教育実践総合センターニュース

No. 25

平成19年3月20日発行

目次

| | |
|---|------------------------------|
| 特集 第7回学部・附属学校園教員 合同研究集会に参加して ----- 1~3 | 公開講演会1報告「サリンと学校の防災」 ---- 7~8 |
| 附属幼稚園研究発表大会報告 ----- 4 | 公開講演会2報告「いじめシンポジウム」 ----- 8 |
| 附属高松小学校・高松園舎 研究発表大会報告 ----- 5 | センター協議会報告 ----- 9 |
| 附属養護学校教育研究発表会報告 ---- 6 | フレンドシップ事業実施報告 ----- 9 |
| 香川大学教員・附属坂出小学校 との共同研究報告 ---- 7 | 教育実践集中講座報告 ----- 10 |
| | 転任のご挨拶 ----- 10 |
| | 寄贈図書・活動日誌・お知らせ ----- 11~13 |

特集 第7回学部・附属学校園教員合同研究集会について

— 新たな歩みを始めた学部・附属学校園教員合同研究集会 —

香川大学教育学部 副学部長 岡田 泰士

第7回学部・附属学校園合同研究集会は、3月5日、本年度、学部と附属学校園が共同して行う教育研究を、尚一層、推進することを目的に設置された「学部・附属学校園共同研究機構」の下、学部および附属学校園、合わせて173名の教員（学部76名、附属学校園97名）が出席して教育学部611講義室で開催されました。

研究発表に先立ち、新見教育学部長より開会の挨拶に加え、教育学部と附属学校園を取り巻く現状と課題といった視点から、それぞれが連携して果たすべく役割と責任について話され、また、附属学校園の教員に対し、教員養成カリキュラムの改善、大学院特別支援教育専攻の設置、教員養成GPの取り組み等、学部における本年度の主な取り組みが紹介されました。



研究発表は、本学部各附属学校園が、これまで、わが国の教育施策を立案するうえで重要なデータを提供し、教育方法等の改善に係る先導的役割を果たしてきた文部科学省指定研究開発について、現在、研究開発学校の指定を受け、研究に取り組んでいる附属高松小学校研究主任・藤井浩史先生と附属坂出中学校研究主任・河内直人先生から研究内容と進捗状況について報告していただきました。また、学部からは院生の教育実践力の向上を図り、附属学校園を実践フィールドとする、本年度開設された「学校教育実践研究」の成果について3名の院生（学校教育専攻・張愛順、朴麗娜、竹田信恵）が報告しました。

藤井先生は、附属高松小学校における学部教員と大学院生との関わりや文部科学省の委託による調査研究に係る学部教員との協同的取り組みを通して連携の現状について報告され、今後の連携の在り方として「子どもと学校」を中心に置き、そこに派生する様々な教育課題を学部（研究）と附属学校園（実践）の教員がそれぞれの立場から協同して研究を進めていく体制づくりの重要性を指摘されました。河内先生は、附属坂出中学校のこれまでの研究成果をさらに発展すべくシャトル学習（各教科学習における異学年合同の発展的な学習）を導入した場合の望ましい教育課程システム、学習内容、指導法等に関する研究について報告されました。今日、生徒一人一人の発達や学びの状況に適応した教育課程の創造が求められている中であって、研究成果が大いに期待されます。そして、院生の発表からは、観察法という間接的な子どもたちとの関わりであるにも拘わらず子どもたちの学びや活動を実際に五感を通して収集したデータによる考察には、「子ども理解」に係る思考の深化が読み取れ、附属学校園を実践フィールドとする「学校教育実践研究」の有用性を強く感じました。

以上のとおり、今回の研究集会は、学部と附属学校園における教育研究の情報交換に止まった感を拭い切れません。しかし、それぞれの発表を通し、学部と附属学校園との協同（協働）による連携がお互いの教育研究を発展させる糧となることが読み取れたのではないのでしょうか。ご発表をいただいた藤井先生、河内先生、そして、院生の皆さんへ厚く御礼申し上げます。

「合同研究集会に参加して」

香川大学教育学部附属坂出中学校 研究主任 河内 直人

これまで香川大学教育学部及び各附属学校園は、それぞれが全国に先駆ける研究を打ち立て、極めて高い評価を得てきた。しかしながら、その教育研究資産は実質上独立したものとして各学校園毎に完結するものであった。それは、互いに拮抗する中で研究の質を高めることにもつながったが、その研究成果が他の附属学校へと還元されないという負の側面も併せ持っていた。もちろん合同研究集会や研究成果物、同教科間での研究成果の報告等はなされてきたが、その検証データや成果、課題そのものを共有するには至っていない。

ただ、強く認識しなければならないのは、現在我々が直面している教育問題や学校を取り巻く環境は、かつてのような研究体制で克服し得るべき質ではないということである。したがって、学部・附属学校園が研究・実践のよきライバルとして、時にはパートナーとしてしっかりと手を携えることが重要と考える。そのためにも、リアルタイムでデータや成果を共有し、ダイナミックかつ広範な研究を可能ならしめる研究ネットワークの構築が求められる。それぞれの附属学校園の特性を生かしながらも、全体で研究を創り上げるための情報の共有である。その中核となるのが今回のような合同研究集会であろう。今後、研究面だけでなく、行事や入試制度、日常の諸問題を含めて問題意識の共有化が図られればと思う。また、具体的な実践については学部の先生方に附属学校を今まで以上に活用していただければと思う。

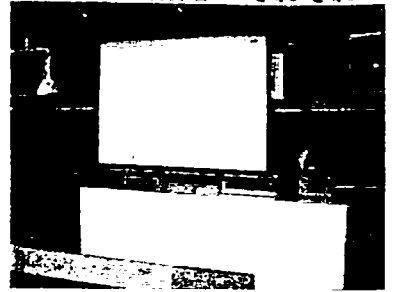


「それぞれの専門性を生かして」

香川大学教育学部附属高松小学校 藤井 浩史

今回のテーマを考えたとき、現在取り組んでいる「教員配置に関する調査研究」はおもしろい取り組みだと感じて報告しました。それは、少人数学級の在り様について学部の先生方はご専門の立場からズバリと切り込んでいるし、われわれ附属教員も教員生活からの経験とカンを働かせて取り組んでいるからでした。一つの教育現場を研究者と実践者がそれぞれの目で見ると研究を進めることはあまり経験したことはなかったからです。いずれかの要請でそれぞれの場に赴き指導をいただいたり講義をしたりすることはあったのですが…。まさに現場発の研究、アクションリサーチだと感じました。

しかし、残念ながらもまだまだその専門性を十分に融合させるまでは至っておりません。来年度も別枠ですがこの研究が継続される予定ですが、さらなる学部・附属の連携・協同が図られる研究が深まることを願っています。



学校教育実践研究「子どもの遊びと保育者の援助」を聞いて

香川大学教育学部附属幼稚園 九郎座 仁美

学校教育専修の竹田信恵さんの研究発表「子どもの遊びと保育者の援助」は、附属幼稚園にとってなじみ深い内容であった。特に、遊びの中で子どもの心が満たされていくことと教師の援助が深くかかわっていることについて、親しみをもって聞かせていただきました。今年度、私たちは「子どもの育ちを支える～人とのかかわりを見つめて～」という研究テーマのもと、研究を進めてきたこともあり、子どもたちのよりよい育ちには、教師の内面が深くかかわっており、子どもが自分で成長していこうとする力を信じたり、その過程を見守ったり、声をかけたりするなど、子どもが自分の力をより発揮していけるような支援が大切だと考え、教師のよりよい支援の在り方を探っていきました。今年度は、学部・附属の連携の一環として竹田さんに保育参観をしていただきましたが、参観のみにとどまってしまったので、来年度はさらに見取りについての話し合いの場をもって、共に研修を深めていきたいと思っています。

教育学研究科共通科目「学校教育実践研究」の成果を聴いて

香川大学教育学部附属幼稚園 高松園舎 津田 千明

今年の合同研究集会では、本園に観察実習の依頼があった大学院生の竹田信恵さんの発表があった。1年間に数回という僅かな時間ではあるが、しっかりとポイントをつかんで観察していたのがよくわかる発表内容であった。保育の形態として、あくまでも子どもの自主性に委ねられた活動と、子どもの自主性を尊重しながらもある程度保育者の意図に沿っての活動と2つの活動事例をあげ、その中で、子どもが学んでいることと保育者の意図や具体的なかかわりを深く分析していた。教育の現場にどっぷりと浸かっている者よりも、少し距離を置いた新鮮な目を見た教育の内容についての示唆はとても興味深いものであった。これからはますます大学院生の研究が深まっていくことを期待したい。



附属幼稚園研究発表大会報告

1 研究会の概要

期 日 平成18年11月10日(金) 9:00~16:10
内 容 公開保育、「人のかかわりの視点から教師の役割を考える」を協議の柱とした
年齢別分科会、全体会(開会式と研究経過報告)等
講 演 「幼稚園教育の歴史から学ぶ—思想・制度・実践—」
上智大学総合人間科学部教授 湯川 嘉津美 氏
参加者 県内外より200名程度

2 研究主題とその解説

研究主題「子どもの育ちを支える」～人とかかわりを見つめて～

昨年度は文部科学省の研究開発校として、「園児・児童・生徒の生活や学びの状況に適応した教育課程を創造するため、新しい教育制度『5・4制』を実施した場合の幼稚園と小学校及び小学校と中学校の接続の在り方並びに、幼・小・中一貫した教育課程、指導方法及び評価方法について」に沿い3年次の研究を推進した。幼稚園での研究の柱は、①「5歳児及び小学校1、2年生の集団を基盤とした生活システム・指導システム・指導方法に対する適応に関する調査」、②「特別な支援を要する子どもの早期発見と指導法の工夫」であった。その研究開発の成果と課題をもとに、今年度は、「子どもの育ちを支える」というテーマで研究に取り組んだ。友達とかかわりの発達の道筋を見つめ直していくとともに、それらにかかわる教師の支援について考えていくことで研究を進めている。

3 今年度の研究内容と成果

「1人の子ども」「1つの遊びや空間の中での子ども達」に焦点を当て、事例を分析していくことにより、その時期その時期の子ども達の発達の状況、教師の支援の意味を探っていくとした。作業の実際として、各年齢の事例を、遊びの段階や友だちとかかわりの段階、子どもたちの具体的な姿に対する教師の支援と内面、教師の位置関係等を整理図として表した。整理を通して教師の支援の在り方を具体的に確認することができつつある。

4 今後の研究課題

まだ見取ることができていない期の事例を書き起こすとともに、引き続き整理図を通した分析を行う。人とかかわりを支える教師の支援の在り方を明らかにしていきたい。



平成18年度 香川大学教育学部附属高松小学校 初等教育研究発表会

平成19年2月1日（木）～2月2日（金）

研究主題

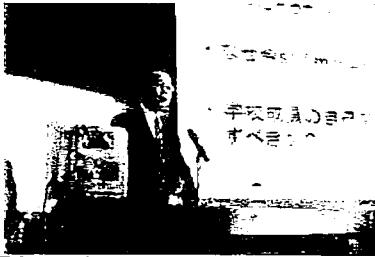
基礎・基本の確かな習得とかけがえのない個性を最大限に生かし能力を伸ばす学びの創造
—子どもの創造的な学びを支える評価システムの構築—

数年間「才能の伸長」というキーワードで研究を進めてきました。昨年度まで課題を自分で感受すること、他者とかかわり合うことという視点で目指す子ども像に迫ろうとしてきました。本年度の研究の視点として、自己実現は自分の目標に対する評価がなければ真の自己実現とはなりえないと考え、教育評価に焦点を絞ってきました。

評価といっても、実に様々な評価があります。今年は、学習時間1時間での評価をまずはじっくりと研究することから始めました。評価基準を設定し、実際の評価活動を提案することで分科会の柱としました。国立教育政策研究所の研究報告で出されているループリックを作成して実践したことも、参観者にとって大きな関心となりました。

このような方法的な側面とともに、「評価基準の共有化」を主張し、教師はもちろん子どもも評価の主体となるように、本時の目標設定と達成状況を子どもと共有する授業を目指す質的な面も提案しました。学習に限らず自分で目標をもち自己評価できる子どもを育成することが、子どもの全人的な教育となるということをカリキュラムを通して育てていくことを主張しました。

このような主張について研究発表会のまとめとなる講演では、日本カリキュラム学会の代表理事を務める田中統治先生がカリキュラムについて興味深いお話をしてくださいました。

| | |
|---|---|
|  | <p>演題 「授業・単元をベースに進めるカリキュラムの改善 について ～幼小連携による才能教育を視野に～」</p> <p>講師 筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授 田中 統治先生</p> |
|---|---|

参会者のアンケートでは、分かりやすい提案であり、それだけに実践が見えやすく議論が白熱したという声がありました。実践と提案が繋がった研究発表会で、今後も現場を大事にした研究を発信していきたいと考えています。

文部科学省から田中壮一郎審議官、磯田文雄私学部長、香川県教育委員会から長谷川和弘教育次長も御参加くださり、ご指導をいただくことができ充実した会となりました。



附属養護学校 第14回教育研究発表会

研究テーマ 暮らしを支える共働支援をめざして
～ WANTSの視点 NEEDSの視点～

平成19年2月9日(金)、第14回教育研究発表会を開催した。県内外の小・中・養護学校・大学及び関係諸機関から300名を超える参会者を迎え、全体会や各学部分科会、ワークショップおよびポスターによる事例発表を行った。



ポスター発表より

1 研究テーマについて

「暮らしを支える」とは、本人が主体的に自分の生き方を表明し、実現しながら暮らしを営めるように教師や保護者などの支援者が環境を整え支援していくことととらえる。また、研究を進める上での視点として表記のサブテーマを設定した。いわゆる「教育的 NEEDS」とは本人、保護者、教師その他支援者が判断したNEEDSである。本校では本人主体をより明確にするために本人が望んでいることを「WANTS」とし、本人以外の支援者が望んでいることを「NEEDS」と定義した。

2 研究の内容と成果

小学部では、子どものWANTSをはぐくむために二つの観点から取り組んだ。一つ目は、子ども自身の意識や技能を高めることである。そのために、WANTSを反映できる機会を意図的に設定したり、WANTSを表出できるようにコミュニケーションスキルの獲得をめざしたりしている。二つ目はWANTSを出しやすい人的、物的環境を整えることを挙げ、分かりやすい環境を整えること、保護者との共働を進めること、周りの支援者と共通理解を図ることを中心に研究に取り組んだ。

中学部では、個から集団へ社会が広がる発達段階にあることから、集団の中でいかに一人一人がWANTSを表明できるスキルを身につけられるのか、その指導方法を探った。そして、学習集団の構成や支援方法の工夫をすることで、一人一人のWANTSに応える集団学習のあり方を追究してきた。

高等部では、教育課程を「仕事」「生活」「余暇」の観点から再編し、特に仕事の分野では職業科を中心に作業学習、職業国語、職業数学を編成し卒業後の職業生活に生かせる力の育成に焦点を当てて取り組んだ。加えて学校設定教科として課題選択学習「ステップアップ」を新設し、その有効性を検証した。

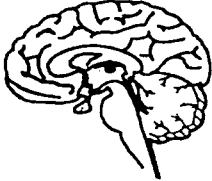
3 今後の課題

今回の取り組みを通して次の点をさらに検討する必要性が生まれてきた。

- ・ WANTSの表明機会の設定と評価方法
- ・ 個別の共働支援計画における意思決定に関する目標の位置づけ方
- ・ WANTSを尊重した授業スタイル
- ・ 学校外でのWANTSの表明と実現に関する取り組み
- ・ WANTSの視点からみた教育内容の再検討

香川大学教員・附属坂出小学校合同研究集会

平成19年2月5日(月)。毎年恒例の香川大学教員と附属坂出小学校との合同研究集会が開催されました。本校では、思考の仕方に関する手続き的な知識＝思考様式を「長期記憶」として子どもの脳内に保存するための方策』を研究の柱に、次のような脳神経科学研究の知見に着目しながら、授業づくりに取り組んでいます。



- 学習者の関心・意欲を喚起させること・・・「意欲・情動」
- 学習したことがらを互いに結び付けること・・・「精緻化」
- 簡略化・焦点化して学習すること・・・「簡略化・焦点化」
- 繰り返し学習すること・・・「繰り返し」



今回公開した国語科の授業「ようすをおもいうかべながらようーはるのゆきだるまー」(第1学年)は、『場面の様子を絵に描くことで、人物の表情、周りの様子と叙述が精緻化され、「ことばを基に気持ちや様子を想像する」という思考様式の定着を図ることができるのではないか』という仮説の下に行われた授業でした。

大学の先生方からは、授業だけでなく、量的研究、質的研究についても貴重なお話をいただくことができました。

大学の先生方と共同で研究に取り組むことの意義は、研究の内容を深めるだけでなく、研究の目的に応じ量的・質的な研究をデザインする(教育研究のメタ理論を作る)ところにもあるのではないかと思います。



公開講演会1報告

講演テーマ「サリン事件と学校における防災について」

アンソニー・ツー (Anthony T. Tu) 先生

主催：香川大学教育学部附属教育実践総合センター

香川大学教育学部フェスティバル in 香大ー未来からの留学生ー

平成18年10月8日(日)に標記の公開講演が開催された。実践センターでは、毎年10月初旬の日曜日に開催されている「香川大学教育学部フェスティバル in 香大ー未来からの留学生ー」の催しに重ねあわせて、公開講演会を開いている。

今回の講演は、コロラド州立大学生化学科教授アンソニー・ツー（Anthony T. Tu）先生を講師に迎えた。ツー先生は、生化学者で毒物学の世界的権威であり、50年近くアメリカで大学生活をおくっておられるものの、日本語も達者で日本語の著書を多数執筆されている。日本の警察科学研究所の依頼を受け、オームサリン事件の解明に尽力され、表彰されている。また、世界24ヶ国、アメリカはもちろんの日本各地の大学や研究所で講演され、九州大学などの外部評価委員を歴任されている。

今回の公開講演会では、オームサリン事件等これまでのさまざまな事件の解明にあたって得られた知見をもとに、世界的な視野のもと、映像等を交えて専門的なお話しをわかりやすくご講演いただいた。学校における防災について、ご専門の立場から、シャワー・洗眼の設備や飲用水の確保等、校内の安全処置に関するお話しを伺うことができた。



これまでの実践センターで行ってきた公開講演会とは、少し異なるテーマ、内容の会となったが、参加者からは、「今回のように、なかなか普通では聞けない講演をやるのは意義があると思います」「日本の防災意識の低さが分かった」「また、このような機会があれば参加したいと思います」等の意見があった。

（文責：田上 哲）

公開講演会2報告

講演テーマ「いじめの実態と対応について -日本・オーストリアの対比を通じて-

平成18年11月4日（土）に、公開講演会「いじめの実態と対応について-日本・オーストリアの対比を通じて-」が開催された。公立学校教員、大学教員、学生（大学院生、学部生）等39名の方に参加していただいた。公開講演会では、教育実践総合センター長による開会あいさつの後、まず話題提供がなされた。阪根健二先生（香川大学教育学部）からは、「日本におけるいじめと対応」についてお話をいただいた。いじめの定義、構造、実態、そして対応についてのお話は、新聞報道をまじえた、具体的でとてもわかりやすいものだった。

次に、ダグマー・シュトロマイヤー先生（ウィーン大学）が、「オーストリアにおけるいじめと対応」について、オーストリアの学校がかかえる課題（例、文化的に多様な子どもたちが在籍していること等）について触れた後、いじめの定義、予防について説明された。戸田有一先生（大阪教育大学）には、通訳とともに、適宜補足説明を行っていただいた。ダグマー先生のお話と戸田先生の補足説明を通じて、日本だけにとどまらない国際的な観点からいじめについて理解を深めることができた。

2人の先生の話提供の後、七條正典先生（香川大学教育学部教育実践総合センター）の進行による指定討論が行われた。指定討論者の戸田先生から、メディアといかに向き合っていくのかという課題が示され活発な討論が展開された。最後にフロアの先生方との質疑応答が行われた。個々の学校現場でどのようにいじめに対応していったらよいのか、いじめの背景にある文化的要因について、話し合いがなされた。

本公開講演会は、阪根先生、ダグマー先生に話題提供をしていただくという国際的なものになった。戸田先生もまた、積極的に海外の研究者と協同研究をしておられる先生である。そうした公開講演会を通じて、改めていじめが、国内外を問わず、大きな教育上の課題となっていることが確認された。また、フロアの先生からもいじめの背景にある文化的要因についてご指摘をいただいた。本公開講演会後のアンケートでは、ほとんどの先生方（87%）に満足したという回答をいただいた。話題提供の先生方、指定討論の先生、そしてフロアの先生方とともに、有意義な公開講演会を開催できたと思われる。（文責：宮前 義和）

教育実践研究関連センター協議会 報告

国立大学教育実践研究関連センター協議会が、本年度は11月・2月の2度開催されました。平成18年11月1日2日にかけて、JR京都駅前のキャンパスプラザ京都で行われた第69回協議会（京都教育大学主催）では、総会において、17年度決算報告・会計監査報告などのほか、センター協議会として応募し採択された現代GP「教員養成のためのモジュール型コア教材開発」について採択報告がなされました。続いて、「教職大学院の制度設計と今後の課題」と題して、京都教育大学教育学部教授 堀内氏による講演が行われました。昼食をのさしみ、各大学におけるセンター運営等に関する3つのテーマ「大学・学部と教員会との連携及び学校現場の支援・貢献とセンターとの関わりについて」「専門職大学院の設置計画とセンターとの関わりについて」「大学・学部の教育改革におけるセンターの関わりについて」のもと、グループに分かれて討議を行った後、{教育臨床部門、教育実践・教師教育部門、教育工学・情報教育部門}の各部門に分かれ、部門会議が行われました。そこにおいて、午前中に採択報告がなされた現代GPのモジュール型コア教材開発について、その目的・理念等について提案されるとともに、教材の内容・構成・デザインや教材開発に関わる役割分担等について、討議が行われました。

平成19年2月12日13日には、東京学芸大学において第70回協議会（東京学芸大学主催）が開催されました。常任幹事会・総会に続き、「教員免許更新制について」と題し、鹿児島大学教育学部 狩野氏より講演が行われました。この講演をもとに、「センターがこれまで関わって実施してきた10年研修などのノウハウを免許更新のための講習の開催に活かすことができるのではないか」との意見が出され、協議会として提案をまとめていく方向が示されました。午後には、各センターの位置づけとその変化に関して小グループ意見交流を行い、教育実践研究関連センターの今日的課題・今後の課題について整理と検討を行いました。一方向行われた部門研究会においては、前回の協議会以降、開発をすすめているモジュール型コア教材（β版）が数点提示され、教材の内容や資料提示デザイン等について検討を行い、改善の方向性を模索しました。（文責：松下 幸司）

フレンドシップ事業 実施報告

平成18年度「教育実践基礎演習（フレンドシップ事業）」は、43名の受講生の参加を得て、無事に行われました。本事業は、学校教育の場である学校から離れた野外において子どもたちとふれあう様々な活動体験を通して、子どもの気持ちや行動を理解し、教育実践のための実践的指導力の基礎を身につけることを目的としています。

本年度はまず、5月10日に、香川県教育委員会主任社会教育主事 河内直人先生、香川県屋島少年自然の家 所長 小国史郎先生、附属坂出小学校・附属高松小学校の先生方にお越しいただき、「生涯学習社会における野外教育の意義について」「野外体験への参加に際しての諸注意」などについて、事前研修を実施しました。6月3日4日には、香川県五色台少年自然の家において開催された「野外教育体験活動 指導者講習会」に参加し、火起こしや飯ごう炊きさんの方法、キャンプファイヤーの運営、救急対処法などについて講習を受けました。続いて2グループに分かれ、6月8日9日の附属坂出小学校 集団宿泊学習（於：屋島少年自然の家）と、7月17日19日の附属高松小学校 集団宿泊学習（於：国立室戸少年自然の家）に参加し、子どもたちと自然体験活動を行うとともに、活動支援の一端を体験しました。総括として8月2日午後、学生の運営によって「野外教育体験シンポジウム」を開催しました。野外教育体験における諸活動をもとに、小グループごとに意見交流を行い、グループ討議の成果を発表した後、学生の発表をふまえ、5月にもお越しいただいた河内先生をはじめ、五色台少年自然の家 次長 佐々木茂先生、附属坂出小学校・附属高松小学校の先生方によるシンポジウムを行いました。

本年度の実施においては、特に、個人記録シート・体験直後の反省討議会・「野外教育体験シンポジウム」などにより、学生自身の活動の見直しと今後の課題の整理を大切にしながら事業をすすめました。本事業に参加した学生からは、「さまざまなことにおいて悩むこともあったが、それが自分自身を成長させてくれたと思う」「反省の場面があったことが本当によかった。…体験が知識に変わり、これからの指導の場面で生かせるようになったと思う」などの意見が寄せられました。

（文責：松下 幸司）

教育実践集中講座実施報告

附属教育実践総合センター客員教授 白井 隆

【第1回（6月期）テーマ】

「学級担任の四季 ～子どもと共に歩む365日～」

学校における教員の役割は教科指導だけではない。特に中学校においての部活動は、生徒が共通する興味・関心を集団的に追求する体育的・文化的な諸活動であり、人間形成の場であることから、教員の職務と考える。講座では、まず、学生の皆さんに部活動の思い出を語ってもらった。「人と人とのつながり」「努力の大切さ」「仲間・団結の大切さ」「自信を持つということ」など、学んだことを是非、子どもたちに伝えて欲しい。

【第2回（11月期）テーマ】

「先生、見逃さないで 子どもが示すシグナルを

～生徒指導上の諸問題への対応・心が響く道徳教育の授業～」

一人一人の顔が違うように子どもはみんな個性がある。つまり、学級の子ども一人一人を理解することが大切である。学級内で、様々な問題が起こったとき、子どもを本当に理解した上で、指導や支援ができているだろうか。

そこで、「学級崩壊」「不登校」「いじめ」をテーマに演習形式で講座を進めた。

問題解決にあたっては、「どの学級でも、どの子どもにも起こり得る」ということを認識し、未然防止、早期発見に努め、問題が発生したときは、一人で悩まず、組織的に迅速な対応を望む。何よりも、日頃からの教師と子どもの触れ合いを大切にしたい。

【第3回（1月期）テーマ】

「子どもたちと共に楽しむ時間

～小学校英語活動と「音」を「楽しむ」音楽活動の授業展開～」

今回の客員教授2人がやっと本来の姿を見せることができた講座である。

小柳先生による小学校での英語活動の在り方の講話や実際の活動体験、私は学級担任による小学校での音楽活動の実践例として、リズム表現を中心とした活動を体験してもらった。

「授業は楽しい。」と再確認した時間であった。

転任のご挨拶

附属教育実践総合センター 田上 哲

転任するにあたり、ご挨拶申し上げます。19年4月より、九州大学大学院人間環境学研究院に、教育学部門・国際教育環境学講座・教育方法学担当として赴任することになりました。

思い返せば、香川大学教育学部附属教育実践総合センターに助教授として着任しましたが、平成13年5月でしたから、6年あまりをこちらで過ごしたことになります。その間、大変慌ただしく忙しい日々でしたが、現センター長西原先生、前センター長湯浅先生、同僚教員の七條先生、宮前先生、松下孝司先生、松下幸司先生の前任の松下文夫先生、教務職員の桑嶋さん、事務補佐員の宮内さん、元教務職員の浅野さん、元事務補佐員の綾田さん、センター教職員の皆様に助けて頂きながら、何とか仕事を遂行することができました。なにぶん少し抜けているところがあり、センター並びに学部・附属学校園の皆様にもいろいろとご迷惑をかけてきたことがあったかもしれませんが、ご寛恕いただければ幸いです。

香川大学では、いろいろなことに挑戦させていただきました。こちらでの貴重な経験とその経験を通して学んだことを自分なりに今後いかしていきたいと思えます。

最後になりますが、香川大学教育学部並びに附属教育実践総合センターのこれからの発展と、皆様のご多幸を祈念いたします。本当にありがとうございました。

寄贈図書(06/08~07/03)

- 障害児教育実践センター年報 第13号 岐阜大学教育学部附属特別支援教育センター
 鳴門教育大学実技教育研究 16 2006 鳴門教育大学実技教育研究指導センター
 甲子園大学発達・臨床心理センター紀要 創刊号 甲子園大学発達・臨床心理センター
 臨床相談研究 第4号 東京家政大学附属臨床相談センター
 臨床相談センター紀要 第六集 特集 家族 東京家政大学附属臨床相談センター
 教育実践総合センター紀要 No. 24 愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター
 平成17年度「子どもとのふれあい体験」実施報告書
 富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター
 共同研究プロジェクト 富山大学スクラムプランー学校バリアフリーへの挑戦ー 2005
 富山大学人間発達科学部・附属学校園
 教育実践総合センター紀要 第29号 宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター
 研究紀要 第14号 宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター
 平成17年度フレンドシップ事業報告書「体験的活動」を通じての学び
 宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター
 教育実践総合センター紀要 第26号 三重大学教育学部附属教育実践総合センター
 2006年度横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集 第6号
 横浜国立大学大学院教育研究科教育相談・支援総合センター
 学校教育実践学研究 第12巻 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター
 平成17年度広島大学教育学部フレンドシップ事業 ゆかいな土曜日 実施報告書
 広島大学教育学部フレンドシップ事業実行委員会
 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 第28号
 秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター
 第10回秋田大学教育実践セミナーー小学校における英語教育を考えるー
 秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター
 「教職キャリア形成問題」講演・シンポジウム記録集 教職キャリア形成と教員養成・現職研修の課題と展望
 福島大学総合教育研究センター
 教育工学・実践研究 第32号 金沢大学教育学部附属教育実践総合センター
 研究紀要 第22号 山口大学教育学部附属教育実践総合センター
 平成17年度新潟大学教育人間科学部「フレンドシップ事業」実施報告書 教員養成初期段階におけるカリキュラム編成の試み
 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
 平成17年度新潟大学教育人間科学部「フレンドシップ事業」実施報告書「研究教育実習」の多様な展開(Ⅱ)
 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
 平成17年度新潟大学教育人間科学部「フレンドシップ事業」実施報告書 新潟市教育委員会
 との連携協力による「学習支援ボランティア」派遣事業の実施
 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
 平成17年度新潟大学教育人間科学部「フレンドシップ事業」実施報告書 講座「被災地における心のケア(Ⅲ)」
 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
 平成17年度 第1回キャリア教育研究会実施報告書 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
 新潟市教育委員会と教育人間科学部の連携による「12年経験者研修」プログラム・教材開発研究-第2年次研究報告
 新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター
 平成16年度大学改革推進経費 地域貢献特別支援事業 児童・生徒の学力向上推進支援事業報告書(第1分冊)
 新潟大学教育人間科学部
 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要No.16 和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター
 平成16年度大学改革推進経費 地域貢献特別支援事業 児童・生徒の学力向上推進支援事業報告書(第2分冊)
 新潟大学教育人間科学部
 島根大学教育臨床総合研究 Vol.5 島根大学教育学部附属教育支援センター
 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 第2号
 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

- お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 第3号
お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター
パイディア Vol.14 滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター
北海道における開かれた学校づくりの試み第4報 北海道教育大学附属教育実践総合センター
生徒指導研究 第17号 兵庫教育大学生徒指導研究会
立正大学臨床心理学研究 第4号 立正大学心理臨床センター
メディア教育研究 2006 Vol.3 No.1 メディア教育開発センター
研究紀要 第5号 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター
札幌学院大学心理臨床センター紀要 第6号 札幌学院大学心理臨床センター
茨城大学教育実践研究 第25号 茨城大学教育学部附属教育実践総合センター
富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究第1号
富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター
IMETS No.160 (財)才能開発教育研究財団
IMETS No.161 (財)才能開発教育研究財団
福井大学教育実践研究 第31号 福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター
"The 5th Seminar-Workshop of the 7th Programming Cycle of APEID Activities
Seminar-Workshop on ICT Professional Development and Teacher Training"
Japanese National Commission for UNESCO Tokyo Gakugei University
こども芸術教育研究センター活動報告書 こども芸術大学 Vol.1
東北芸術工科大学こども芸術教育研究センター
福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター公開シンポジウム報告書
福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター
鳴門教育大学学校教育研究紀要 No.21, 2006 鳴門教育大学地域連携センター

【センター活動報告 (06/08~07/03)】

- 8月2日(水) フレンドシップ野外教育体験シンポジウム
9月14日(木) 第3回フレンドシップ実施専門委員会
9月20日(水) 第7回専任会議
10月8日(日) 第1回公開講演会
11月1日(木)~2日(金) 第69回 国立大学教育実践研究関連センター協議会
11月4日(土) 第2回公開講演会(公開シンポジウム)
11月7日(火) 第8回専任会議
11月8日(水) 教育実践集中講座(11月期1回目)
11月10日(金) 第1回教師教育に関する研究プロジェクト
11月15日(水) 教育実践集中講座(11月期2回目)
第9回専任会議
11月16日(木) 第1回道徳教育に関する研究プロジェクト
11月22日(水) 教育実践集中講座(11月期3回目)
11月28日(火) 第10回専任会議
11月29日(水) 教育実践集中講座(11月期4回目)
12月6日(水) 教育実践集中講座(11月期5回目)
12月8日(金) 第3回編集会議
第11回専任会議
12月12日(火) 第2回道徳教育に関する研究プロジェクト
12月15日(金) 第12回専任会議
12月22日(金) 第4回編集会議
12月27日(水) 第3回企画推進委員会
1月15日(月) 第2回管理委員会
1月19日(金) 第4回企画推進委員会
1月24日(水) 教育実践集中講座(1月期1回目)
1月30日(火) 第13回専任会議

- 1月31日(水) 教育実践集中講座(1月期2回目)
第3回道徳教育に関する研究プロジェクト
- 2月12日(月)～13日(火) 第70回 国立大学教育実践研究関連センター協議会
- 2月15日(木) 第4回道徳教育に関する研究プロジェクト
- 2月20日(火) 第14回専任会議
- 2月21日(水) 第2回教師教育に関する研究プロジェクト
- 2月27日(火) 第3回管理委員会
- 3月5日(月) 第7回学部・附属学校園教員合同研究集会
- 3月7日(水) 第15回専任会議
- 3月16日(金) 第5回道徳教育に関する研究プロジェクト
- 3月17日(土) センター研究会

【センターからのお知らせ】

集団療法室及び教育相談室の利用の手引きを作りました。
ご利用の際は、下記の手引きに従って頂きますようお願い致します。

『集団療法室 及び 教育相談室の利用の手引き』

香川大学教育学部附属教育実践総合センター(以下「センター」という)利用規程に基づく。

- ・ 申込手順: センター事務室で使用申請書を記入してください。
後日、利用の可否を連絡します。
- ・ 利用申込時間: 毎月曜日～金曜日 10:00～17:00
(なお、利用者は以下の点に、十分、ご留意下さい。)

留意点

- (1) スリッパの使用について
 - ・ 土足での入室はできません。
 - ・ 集団療法室は室内にくつ箱がありますが、入り口からくつ箱までの室内も土足は禁止です。下ぐつは集団療法室ドアの外に置いていただき、その上で中にあるスリッパを使用してください。また、教育相談室のくつ箱につきましては、スリッパと下ぐつを入れる場所を区別しております。下ぐつについた泥等がスリッパにつき、室内に持ち込まれるのを防ぐためです。下ぐつは、下ぐつを入れる場所に入れてください。
- (2) 飲食について
室内での飲食は禁止です。
- (3) 洗面所について
集団療法室及び教育相談室の洗面所を使用してはいけません。
- (4) 原状の回復について
使用後は元の状態に部屋をもどして下さい。破損等のおそれがある場合には、原則として教室を使用することはできません。
- (5) 備品等について
集団療法室及び教育相談室の備品、遊具等は一切持ち出せません。画用紙等を用いて作品を製作して子どもに持ち帰ってもらう場合には、教室使用者が画用紙等を用意してください。また、使用申請書には使用物品名を記すことになっていますが、遊具等が壊れる等あった場合には必ず報告するようにしてください。
- (6) 学校臨床心理専攻学生が使用する場について
学校臨床心理専攻学生が使用する場合には、センター利用規程に従い、相談のスーパーバイズをしてもらっている教員が使用申請書を作成してください。また、鍵と教室の管理は、スーパーバイザー(教員)が行ってください。

教育実践総合研究第15号原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第15号は、5月31日(木)原稿受付締切です。以下の投稿要領を参考に、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究投稿要領

1 (投稿の要領)

香川大学教育実践総合研究(以下「教育実践総合研究」という。)への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる

2 (投稿の内容)

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料(研究ノート、研究動向の紹介など)及び香川大学教育学部附属教育実践総合センターの活動報告などを掲載する。

3 (投稿者)

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議(以下、「会議」という。)が特に依頼した者とする。

4 (投稿原稿の提出方法)

投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロで作成し、ワープロ打ち出し原稿2部と、原稿を保存したフロッピーディスク等を会議に提出する。

5 (投稿原稿の長さ)

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁(1頁は21字×42行×2段)以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6 (刷り上がり1頁目の形式)

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属(所在地)、和文要旨(200字)及びキーワード(5語)を含むものとする。

7 (投稿原稿の取り扱い)

投稿された論文等は、会議において査読を行い、その取り扱いを次のいずれかに決定する。(1)採録 (2)条件つき採録 (3)返戻

8 (校正)

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則

本要領は、平成元年5月17日から施行し、平成元年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成12年3月6日から施行し、平成11年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

香川大学教育学部附属教育実践総合センターニュース

No. 25

発行日：平成19年3月20日

編集発行：香川大学教育学部附属教育実践総合センター 代表者 西原 浩

URL <http://edu-center.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/> E-mail : jcen@ed.kagawa-u.ac.jp

[〒760-8522 高松市幸町1-1 Tel. 087-832-1683 Fax. 087-832-1689]